

2021 年度
調査報告書

**小学生のスポーツ活動における
保護者の関与・負担感に関する調査研究
(速報値)**

調査概要

1. 1 調査目的

2016年度(2017年2月)に実施した第1回調査に引き続き、子どものスポーツ活動に対する保護者の関与の実態や意識を明らかにする。

速報値では、特に保護者の関与において 1)コロナ禍を挟んだ5年間で変化はみられるのか 2)母親中心のジェンダー構造に変化はみられるのか の2点を中心に検討する。

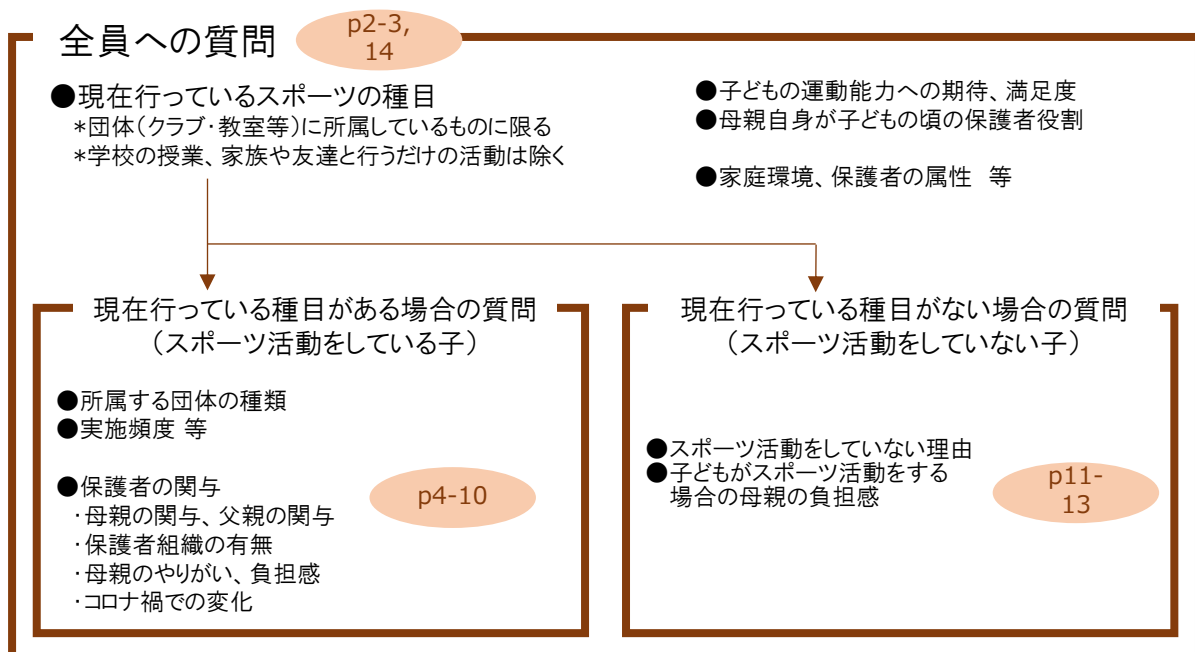
1. 2 調査方法・調査対象

調査会社の登録モニターを用いたインターネット調査。小学校1年生～6年生の第1子をもつ母親を対象とし、複数の子どもがいる場合は第1子について回答してもらった。回収にあたっては、対象となる子どもの学年・性別が均等になるよう割付をしている(全学年男女各200名)。有効回答数2,400人。

1. 3 調査時期

2021年9月

1. 4 主な調査項目



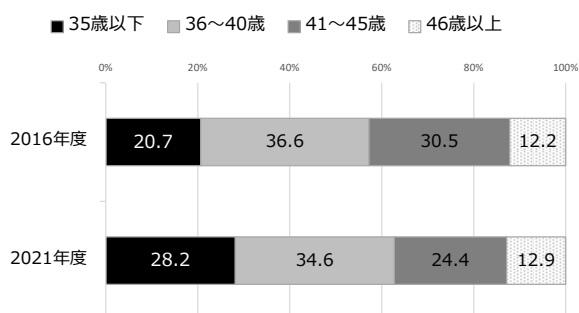
1. 5 調査担当

宮本 幸子(笹川スポーツ財団 シニア政策オフィサー)

清水 恵美(笹川スポーツ財団 政策オフィサー)

1. 6 基本属性

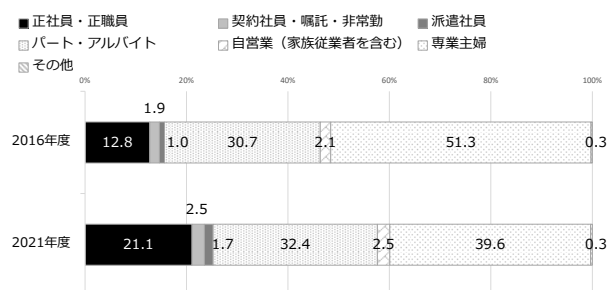
母親の年齢



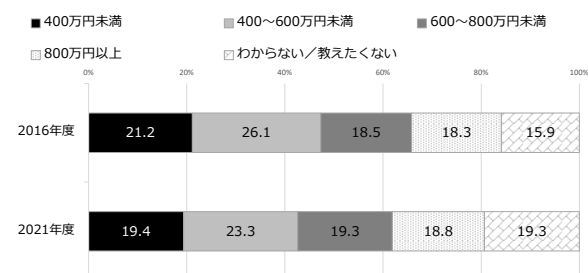
子どもの人数



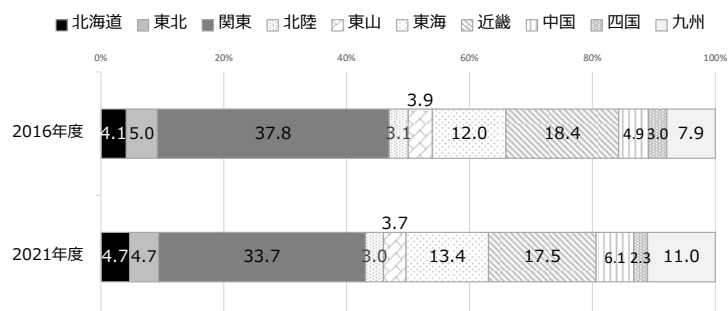
母親の就業形態



世帯年収



居住地区

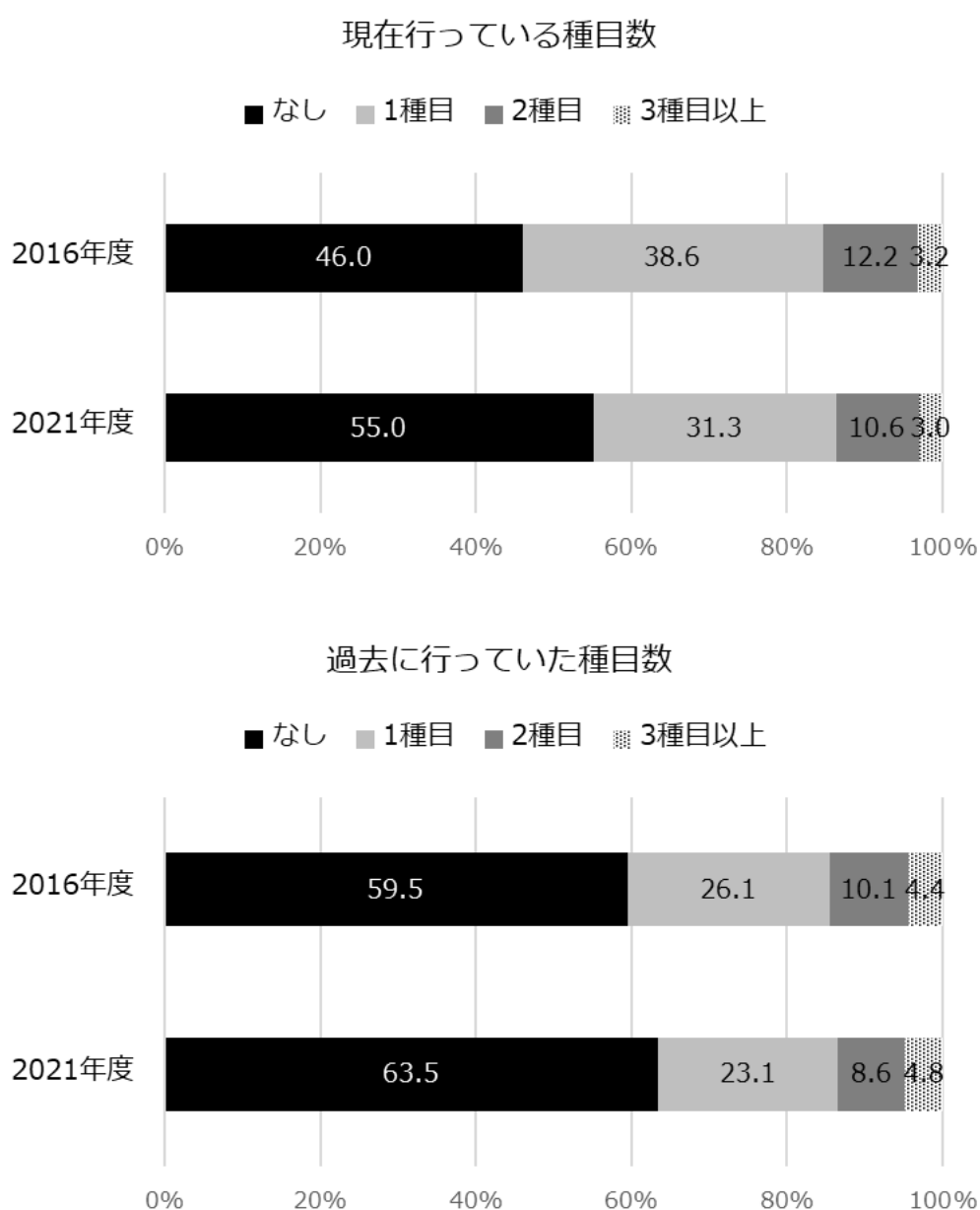


2. 調査結果

(1) 子どものスポーツ活動の種目数

「お子様は小学生になってから、団体(クラブ・教室等)に所属して、以下のようなスポーツ活動を定期的に行ったことがありますか」と尋ね、その回答をもとに、現在行っている種目数および過去(小学生の間)に行っていた種目数を算出した(図表1)。結果をみると、現在の種目数「なし」が2016年46.0%→55.0%と9ポイント増加し、「1種目」が38.6%→31.3%へと減少した。また、過去に行っていた種目でも「なし」が59.5%→63.5%へと微増した。

図表1 スポーツ活動の種目数



n=2,400

(2) コロナ禍での変化①

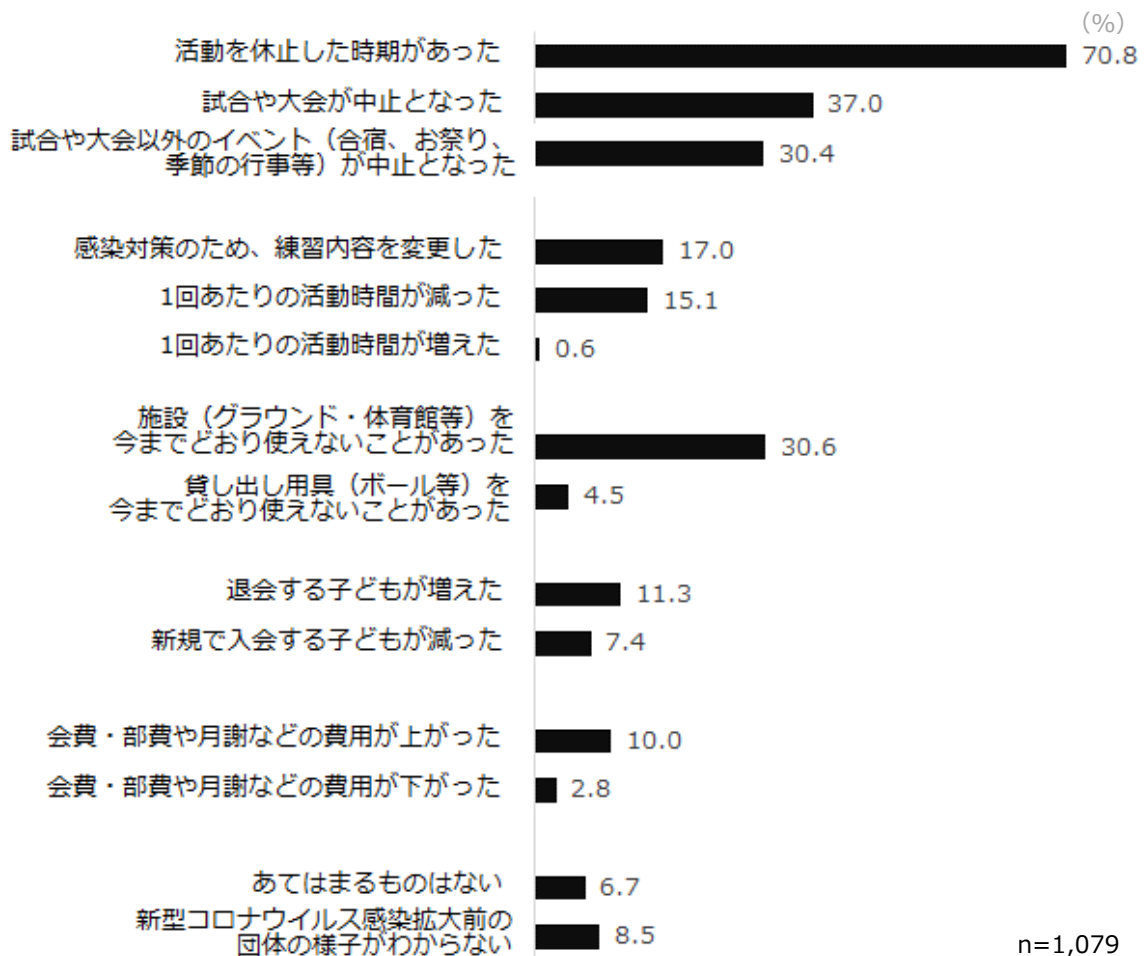
子どもがスポーツ活動を行っている母親に対して、所属する団体(クラブ・教室等)における新型コロナウイルスの感染拡大以降(2020年3月以降)の変化を尋ねた(図表2)。

「あてはまるものはない」6.7%と「新型コロナウイルス感染拡大前の団体の様子がわからない」8.5%を除いた計84.8%が、新型コロナウイルスの影響を受けたと認識している。数値が高いのは活動の休止・中止に関する内容で、「活動を休止した時期があった」は70.8%に達した。ほかにも「試合や大会が中止となった」37.0%、「試合や大会以外のイベント(合宿、お祭り、季節の行事等)が中止になった」30.4%と、保護者が付き添いや運営の補助をする機会の減少につながった可能性がある。

「退会する子どもが増えた」は11.3%、「新規で入会する子どもが減った」は7.4%で、いずれか片方でも選択した母親は15.1%であった。活動の一時的な休止・中止に比べて、活動する子どもの数が減った団体はそれほど多くなかったといえよう。

他の項目では「施設を今までどおり使えないことがあった」が30.6%、「感染対策のため、練習内容を変更した」が17.0%であった。一部の団体に限られるものの、活動場所の確保や練習内容の変更により、日頃の練習においても新型コロナウイルスの影響がみられた。

図表2 コロナ禍での変化①(スポーツ活動をしている子)



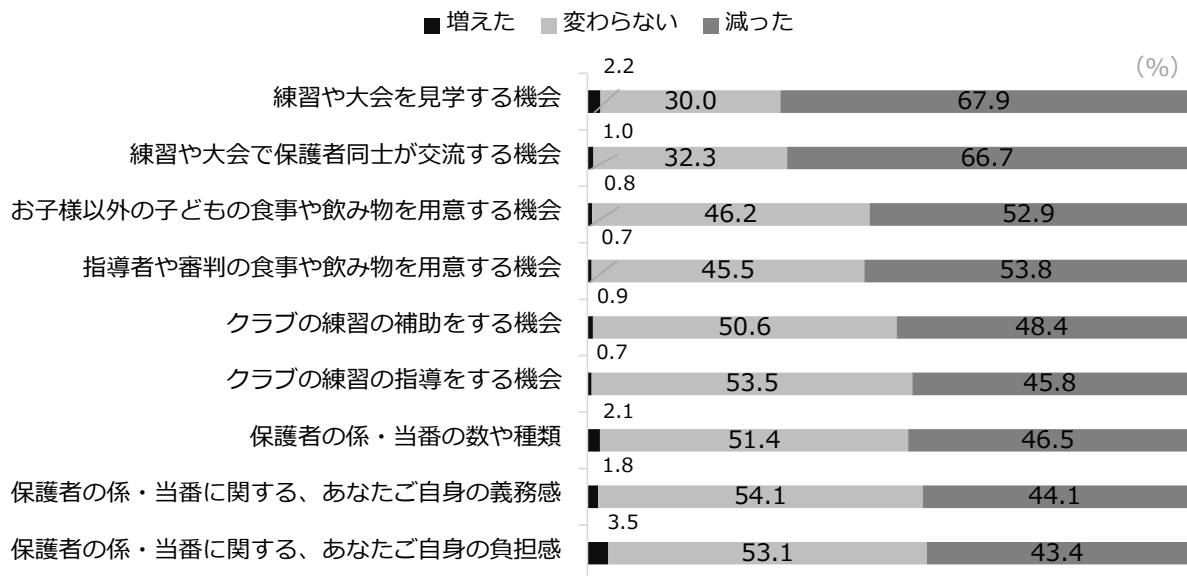
注) 複数回答。

(3) コロナ禍での変化②

同じく子どもがスポーツ活動を行っている母親に対して、所属する団体(クラブ・教室等)における保護者の役割を中心に、新型コロナウイルスの感染拡大以降(2020年3月以降)の増減を尋ねた(図表3)。なお、「コロナ以前から存在しない」「わからない」を除外して集計しているため、項目によってケース数は異なる。

グラフを見ると、いずれの項目でも「増えた」はごく少数しかみられない。特に「練習や大会を見学する機会」では「減った」が67.9%と6割を超えた。また、「練習や大会で保護者同士が交流する機会」も、「変わらない」32.3%に対して「減った」は66.7%であった。感染対策の結果、スポーツ活動において子どもの成長を感じたり親同士のつながりを築いたりする機会が失われた保護者が一定数いることが推察される。「当番の数や種類」も「変わらない」51.4%、「減った」46.5%となり、コロナ前後の様子を認識している母親たちの約半数が減ったと回答している。保護者の係や当番に対する、「あなたご自身の義務感」や「負担感」も、「変わらない」が約半数、「減った」が約45%となり、コロナ以前から所属する団体の様子を知る母親たちのうち、5割程度は負担感や義務感が軽くなったと認識している。コロナ禍で必要な係・当番を精査する機会となった可能性もあり、平時に戻った時にどのような傾向がみられるか注目される。

図表3 コロナ禍での変化②(スポーツ活動をしている子)



注) 子どもがスポーツ活動をしている母親(n=1,079)が回答。各項目「コロナ以前から存在しない」「わからない」を除いて集計している。

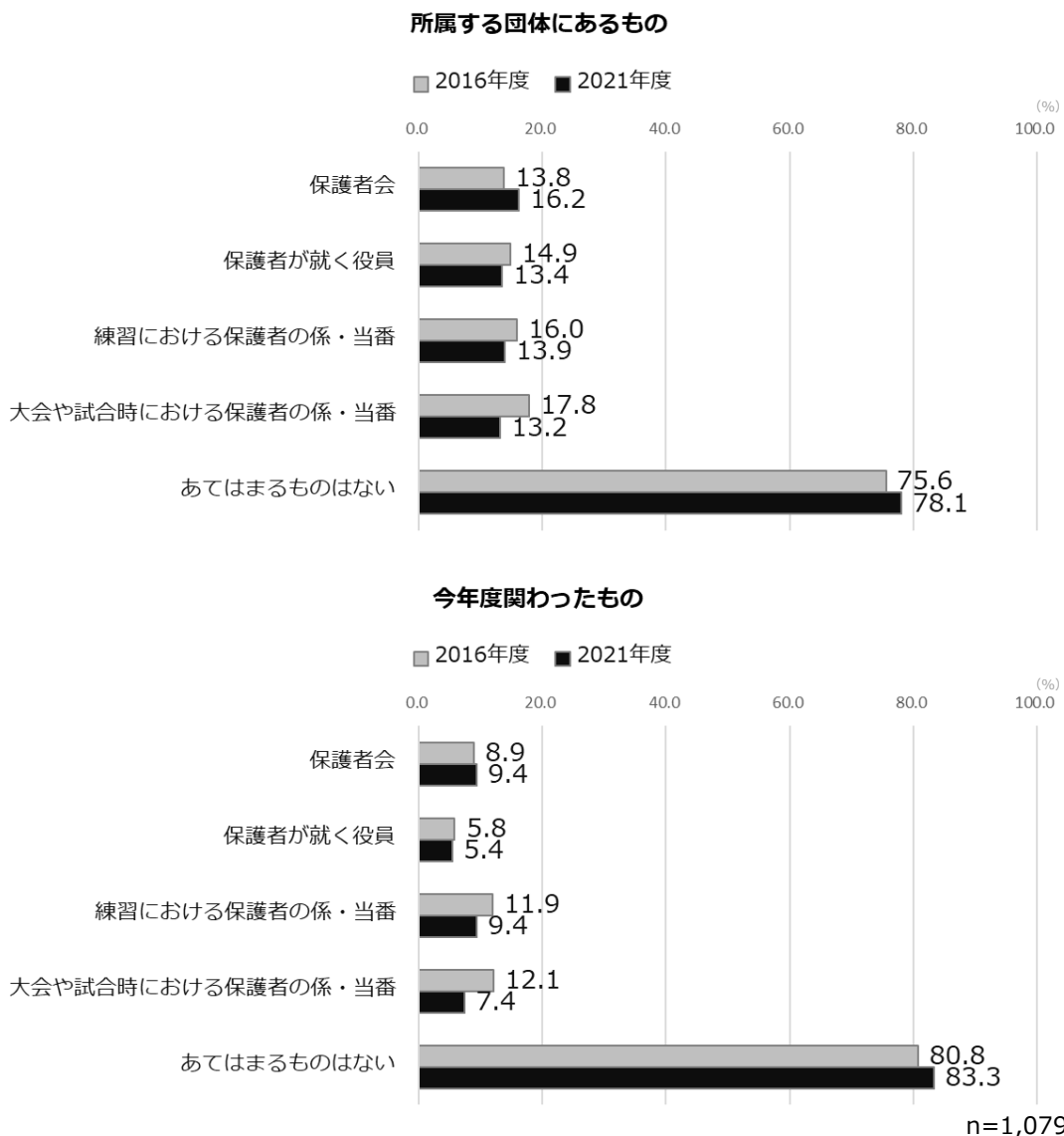
(4) 所属する団体の保護者組織

子どもが所属する団体にある保護者組織と、そのうち 2021 年度に母親自身が関わったものを、それぞれ複数回答で選んでもらった(図表 4)。2016 年度と比較すると、「大会や試合時における保護者の係・当番」はいずれも減少し、特に母親本人が関わった比率は 2016 年度 12.1%→2021 年度 7.4%となった。

ほかには大きな変化はみられず、所属する団体に該当する組織・役割が「ない」のは 78.1%、母親自身が何も関わっていない比率は 83.3%であった。前のデータと合わせて解釈すると、コロナ以前から保護者の組織や役割があった団体ではそれらを継続させ、その中での活動頻度等が減少したと考えられる。

以上、子どもたちが所属する団体についての項目をみた。保護者の組織・役割そのものは継続しているものの、その中で保護者が関与する活動(普段の活動、大会・試合、その他のイベント)が減少し、保護者の見学や指導・運営補助の機会、係や当番に伴う負担感・義務感も減少傾向にあることが明らかになった。一方で変化の少ない団体・保護者もみられ、今後詳細な分析を行いたい。

図表 4 所属する団体の保護者組織(スポーツ活動をしている子)



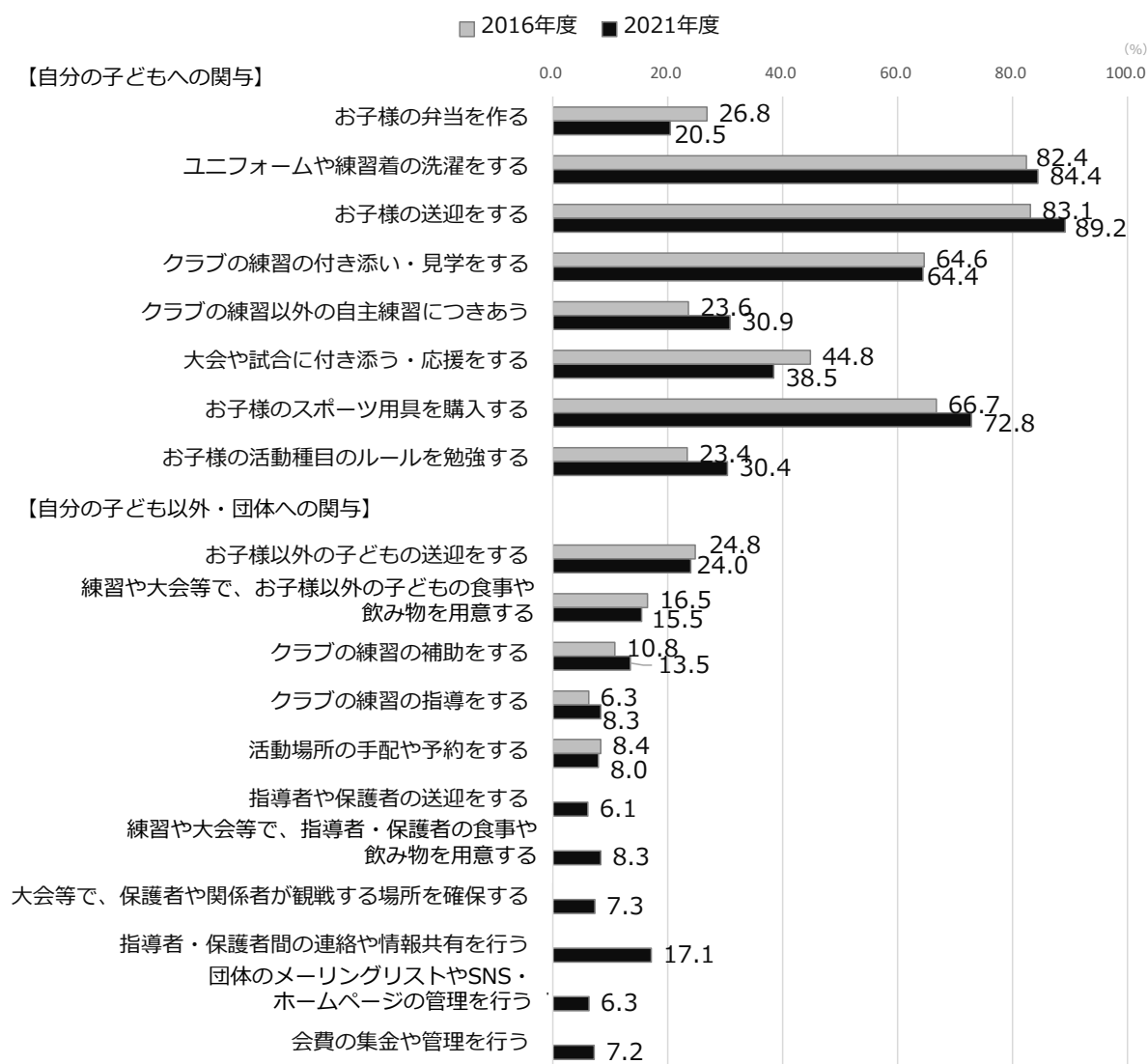
注) いずれも複数回答。

(5) 母親の関与・父親の関与

子どものスポーツ活動に対する、母親・父親の関与の実態を尋ねた。図表 5-1 が母親の関与、図表 5-2 が父親の関与である。経年変化に着目すると、母親・父親ともに「お子様の送迎をする」が増加し、「大会や試合に付き添う・応援をする」が減少するという共通の傾向がみられる。母親ではほかに、「クラブの練習以外の自主練習につきあう」「スポーツ用具を購入する」「活動種目のルールを勉強する」が増加、「弁当を作る」が減少していた。図表 2 (p4) でみたように、コロナ禍で長時間の活動や大会・イベントなどが難しくなり、弁当を作ったり大会や試合を応援したりする機会は減少したと考えられる。一方で、自主練習・ルールの勉強など、自分の子どもに直接かかわる行動は増えている。団体の活動が思うようにできない中で、個々の保護者が子どものスポーツ活動継続のために尽力していた様子が見えてくる。

また、今回の調査では団体全体に関わる活動について新しく項目を追加した。これらは前回調査のグ

図表 5-1 母親の関与(スポーツ活動をしている子)



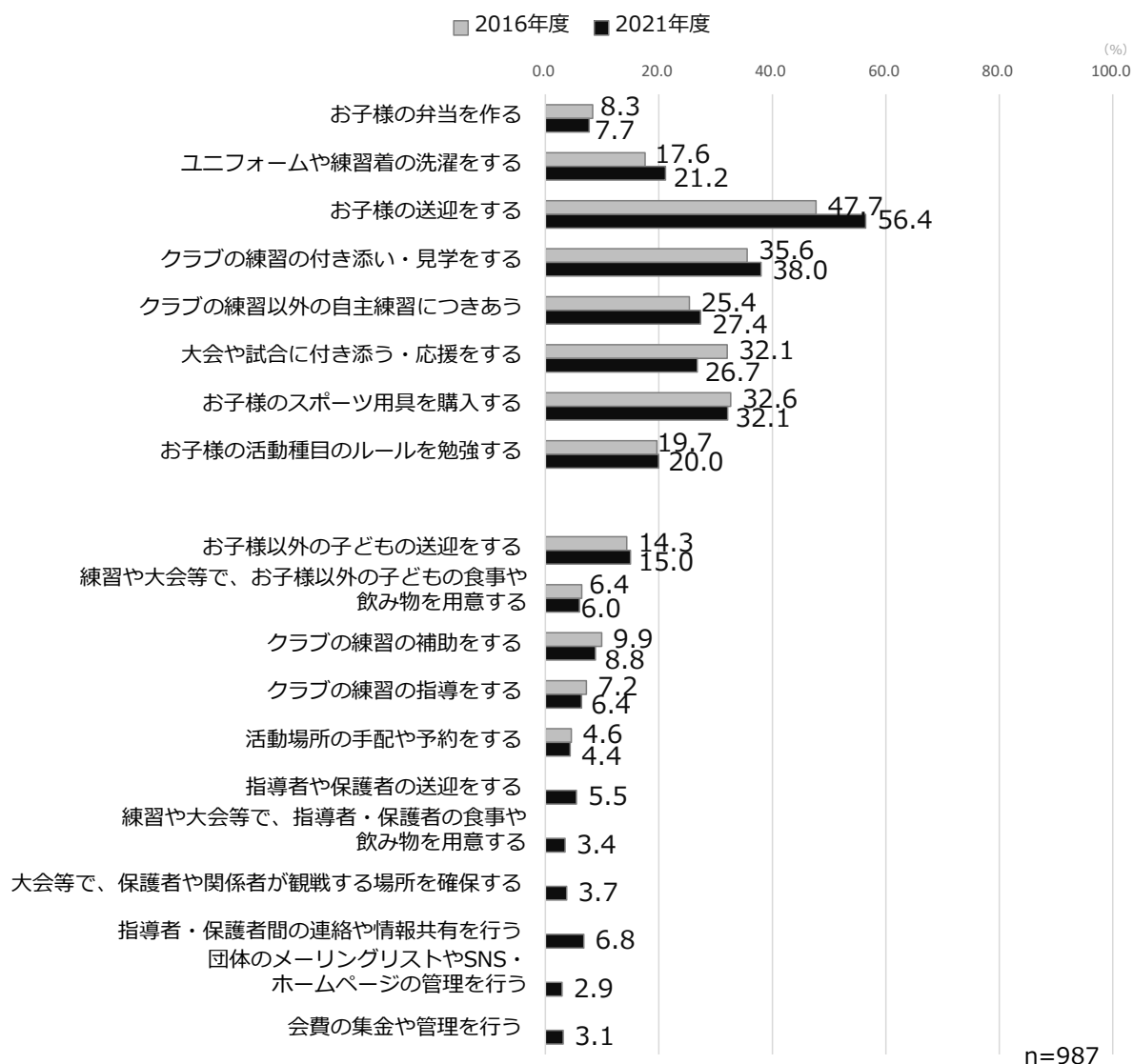
n=1,079

注)「よくする」+「時々する」の%。

ループインタビューで、役員などを務めている母親から聞かれた内容である。数値をみると、「指導者・保護者間の連絡や情報共有を行う」では母親 17.1%>父親 6.8%と、10ポイント以上の差があった。「指導者・保護者の食事や飲み物を用意する」「大会で、保護者や関係者が観戦する場所を確保する」「団体のメーリングリストや SNS・ホームページの管理を行う」「会費の集金や管理を行う」の4項目は、いずれも母親が 6～8%程度、父親が 2～4%程度であった。また、「クラブの練習の指導をする」(母親 8.3%、父親 6.4%)「指導者や保護者の送迎をする」(同 6.1%、5.5%)については、母親と父親でほとんど差はみられなかった。

一方で、「ユニフォームや練習着の洗濯をする」では約 60ポイント、「お子様のスポーツ用具を購入する」では約 40ポイント、「お子様の送迎をする」「クラブの練習の付き添い・見学をする」では約 30ポイント、「お子様以外の送迎をする」「お子様以外の子どもの食事や飲み物を用意する」では約 10ポイント、母親が父親の数値を上回るなど、全体的に母親中心に関与している様子は前回と変わらなかった。

図表 5-2 父親の関与(スポーツ活動をしている子)



注 1)「よくする」+「時々する」の%。

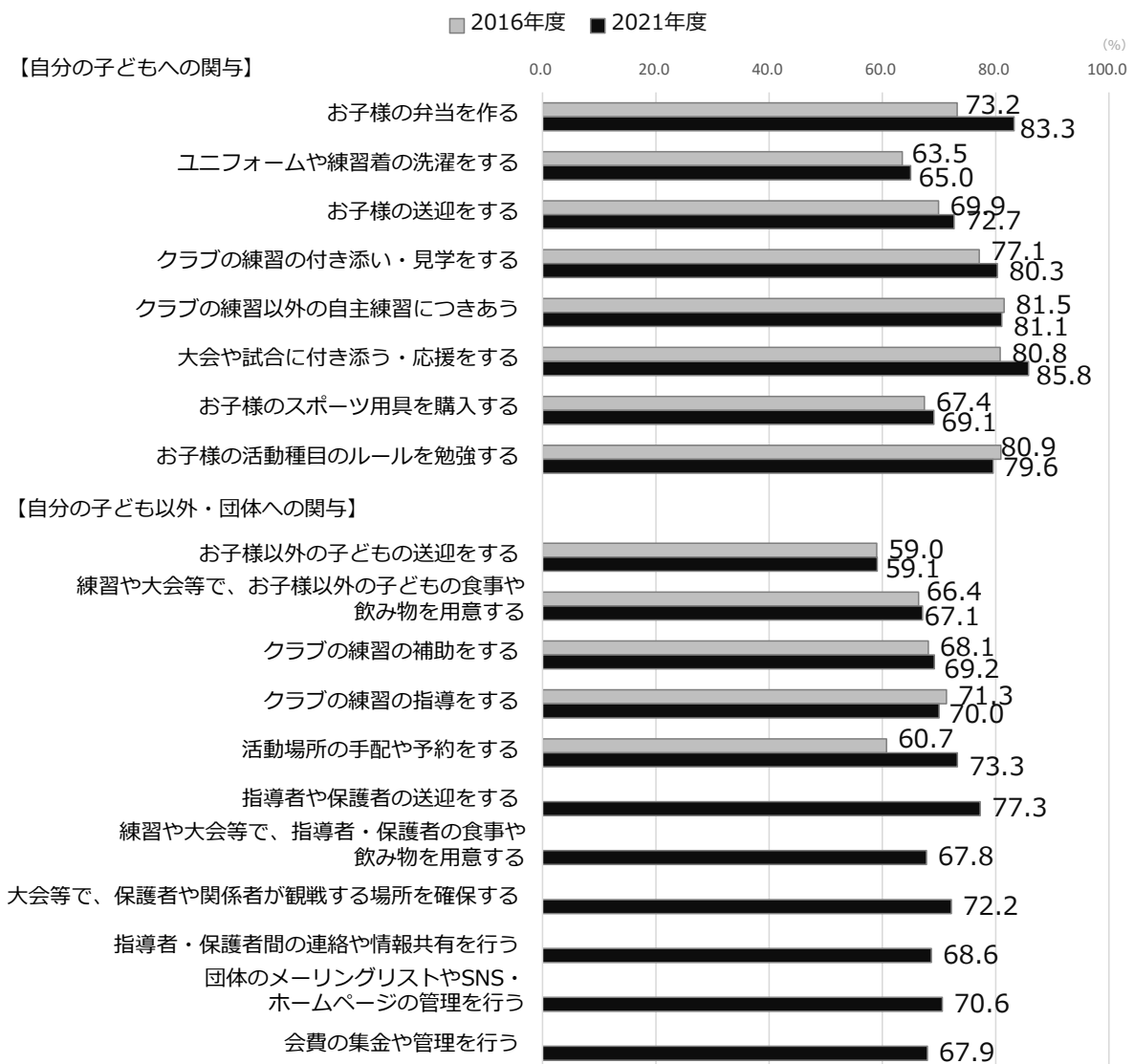
注 2)配偶者がいる人のみ回答。

(6) 母親のやりがい・負担感

子どものスポーツ活動に関与している母親に対して、やりがいや負担を感じているのか尋ねた(図表 6-1、6-2)。やりがいについては全体的に「感じている」の数値が高く、「弁当を作る」「大会や試合に付き添う・応援をする」「活動場所の手配や予約をする」は前回調査より5ポイント以上増加した。増加の要因として、一つには活動機会が減少した分、従来から子どもの活動に深く関与する傾向にあった熱心な保護者が中心になっていることが考えられる。また、コロナ禍で保護者が子どもたちの環境をよくすることに対して、よりポジティブな意義を見出せるようになったという心理面での変化も考えられるだろう。

また先述の通り、今回の調査では団体全体に関わる活動について新規項目を追加した。これらは調査対象の母親のなかでも一部の人たちのみが関わっており、最も数が少ない「指導者や保護者の送迎をする」ではn=66である。いずれも7割前後が「やりがいを感じている」と回答している。

図表 6-1 母親のやりがい(スポーツ活動をしている子)



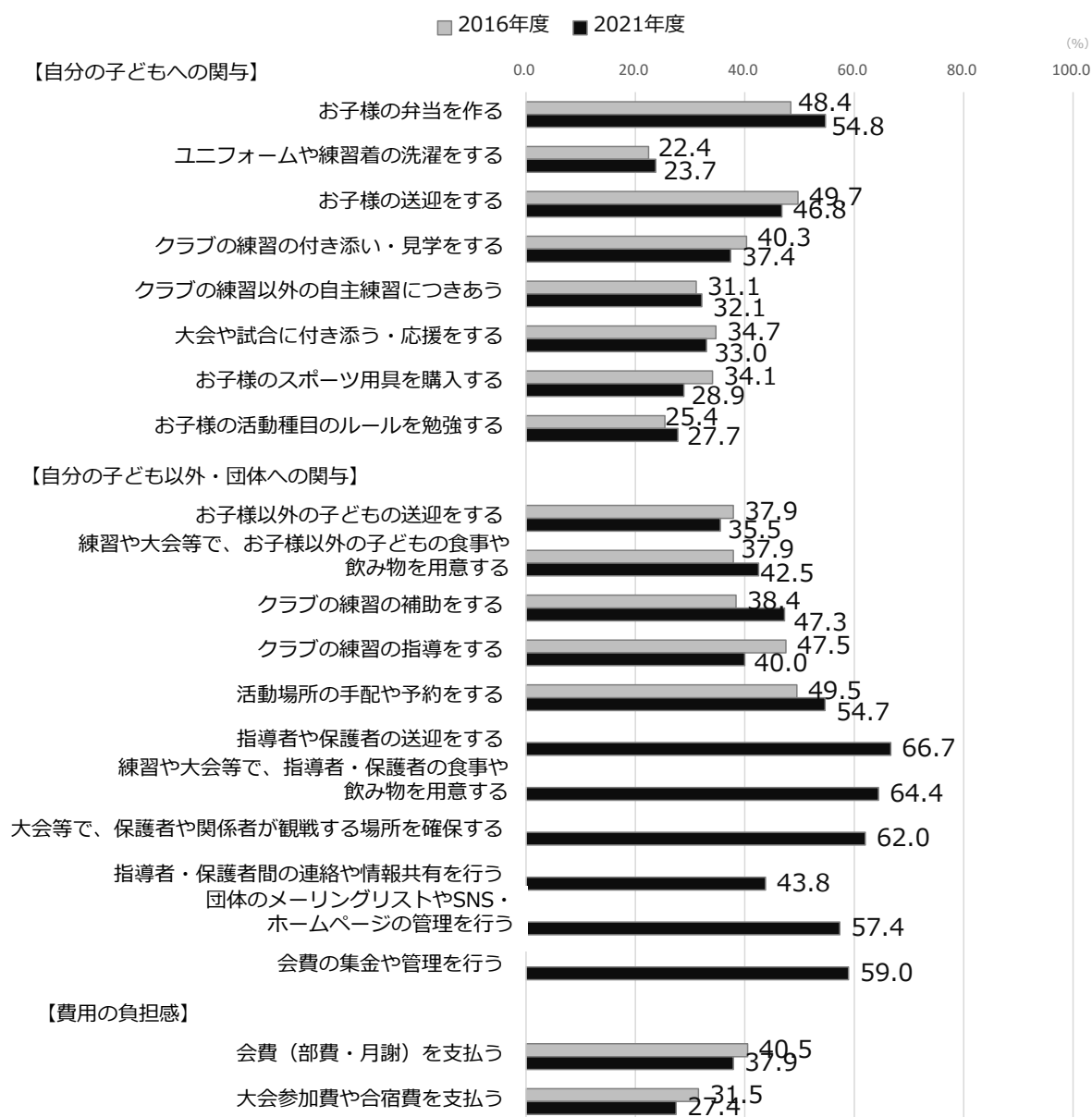
注1) 「とてもやりがいを感じている」+「まあやりがいを感じている」の%。

注2) それぞれの関与を「よくする」「時々する」人を母数にしている。

続いて負担感の結果をみる(図表 6-2)。2021 年度全体の傾向をみると、まず今回新たに加えた項目の負担感の高さが目立つ。「指導者や保護者の送迎をする」(66.7%)、「練習や大会等で、指導者・保護者の食事や飲み物を用意する」(64.4%)、「大会等で、保護者や関係者が観戦する場所を確保する」(62.0%)、「会員の集金や管理を行う」(59.0%)、「団体のメーリングリストや SNS・ホームページの管理を行う」(57.4%)が、全体の上位 5 つを占めている。団体全体に関わる活動は一部の人のみが行い、やりがいもある程度高いものの、負担感は大いことがわかる。

前回から尋ねている項目で 5 ポイント以上変化したものをみると、増えた項目は「弁当を作る」(6.4 ポイント増)「クラブの練習の補助をする」(8.9 ポイント増)「活動場所の手配や予約をする」(5.2 ポイント増)、減った項目は「スポーツ用具を購入する」(5.2 ポイント減)「クラブの練習の指導をする」(7.5 ポイント減)であった。細かな数値の増減はあるものの、概ね前回調査で負担感が高かった項目は今回も高い傾向がみられた。

図表 6-2 母親の負担感(スポーツ活動をしている子)



注1) 「とても負担に感じている」+「やや負担に感じている」の%。

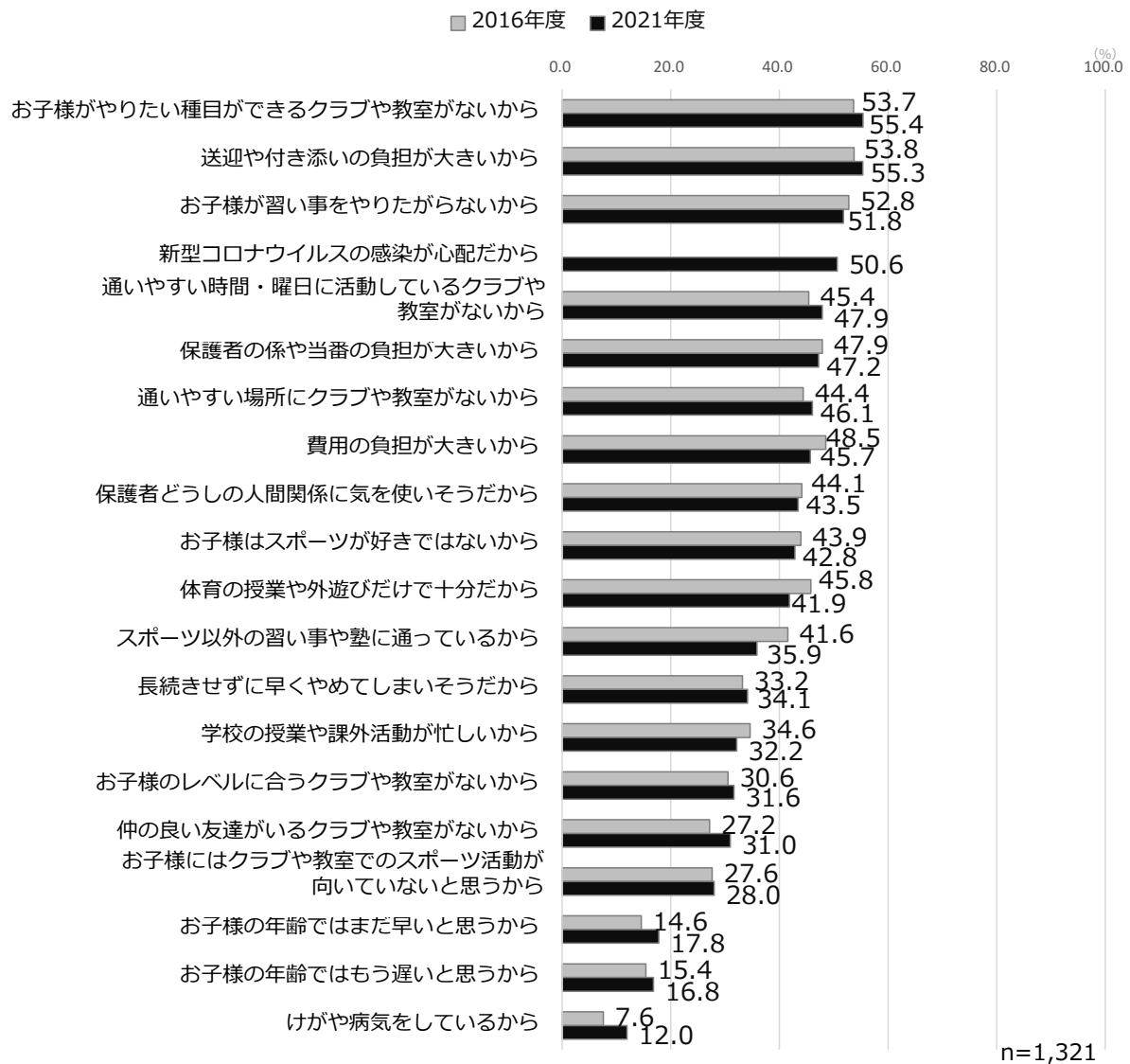
注2) 「会費を支払う」「大会参加費や合宿費を支払う」以外の 19 項目については、それぞれの関与を「よくする」「時々する」人を母数にしている。

(7) スポーツ活動をしらない理由

子どもがスポーツ活動をしていない場合に、その理由を尋ねた(図表 7-1)。5ポイント以上の変化がみられたのは「スポーツ以外の習いごとや塾に通っているから」(5.7ポイント減)のみで、全体としては前回調査から大きな変化はみられなかった。保護者からみた子どものスポーツ活動の阻害要因は、年度による変化が少ないものと考えられる。

半数を超えたのは「お子様がやりたい種目ができるクラブや教室がないから」(55.4%)「送迎や付き添いの負担が大きいから」(55.3%)「お子様が習い事をやりたがらないから」(51.8%)「新型コロナウイルスの感染が心配だから」(50.6%)の4つであった。前回調査に引き続き「保護者の係や当番の負担が大きいから」(47.2%)「費用の負担が大きいから」(45.7%)も5割近くに達した。

図表 7-1 スポーツ活動をしらない理由(スポーツ活動をしていない子)



注) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

図表 8-1 のうち、保護者の負担に関わる項目について世帯年収別に分析すると、前回調査とほぼ同様の傾向がみられた(図表 7-2)。「費用の負担が大きいから」(400 万円未満 59.9% > 800 万円以上 27.3%、以下同)で特に差が大きい。「送迎や付き添いの負担が大きいから」(61.8% > 47.9%)、「保護者の係や当番の負担が大きいから」(53.1% > 38.7%)、「保護者どうしの人間関係に気を使いそうだから」(48.1% > 31.4%)でも差がみられ、保護者の負担感は家庭の SES や保護者の生活状況にも影響を受けていると考えられる。

図表 7-2 スポーツ活動をしらない理由(世帯年収別)

	400万円 未満 (322)		600万円 未満 (313)		800万円 未満 (212)		800万円 以上 (194)
費用の負担が大きいから	59.9	»	49.5	»	38.2	»	27.3
送迎や付き添いの負担が大きいから	61.8		57.2		53.8	>	47.9
保護者の係や当番の負担が大きいから	53.1		49.8		46.7	>	38.7
保護者どうしの人間関係に気を使いそうだから	48.1		49.8	>	41.5	»	31.4

注 1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

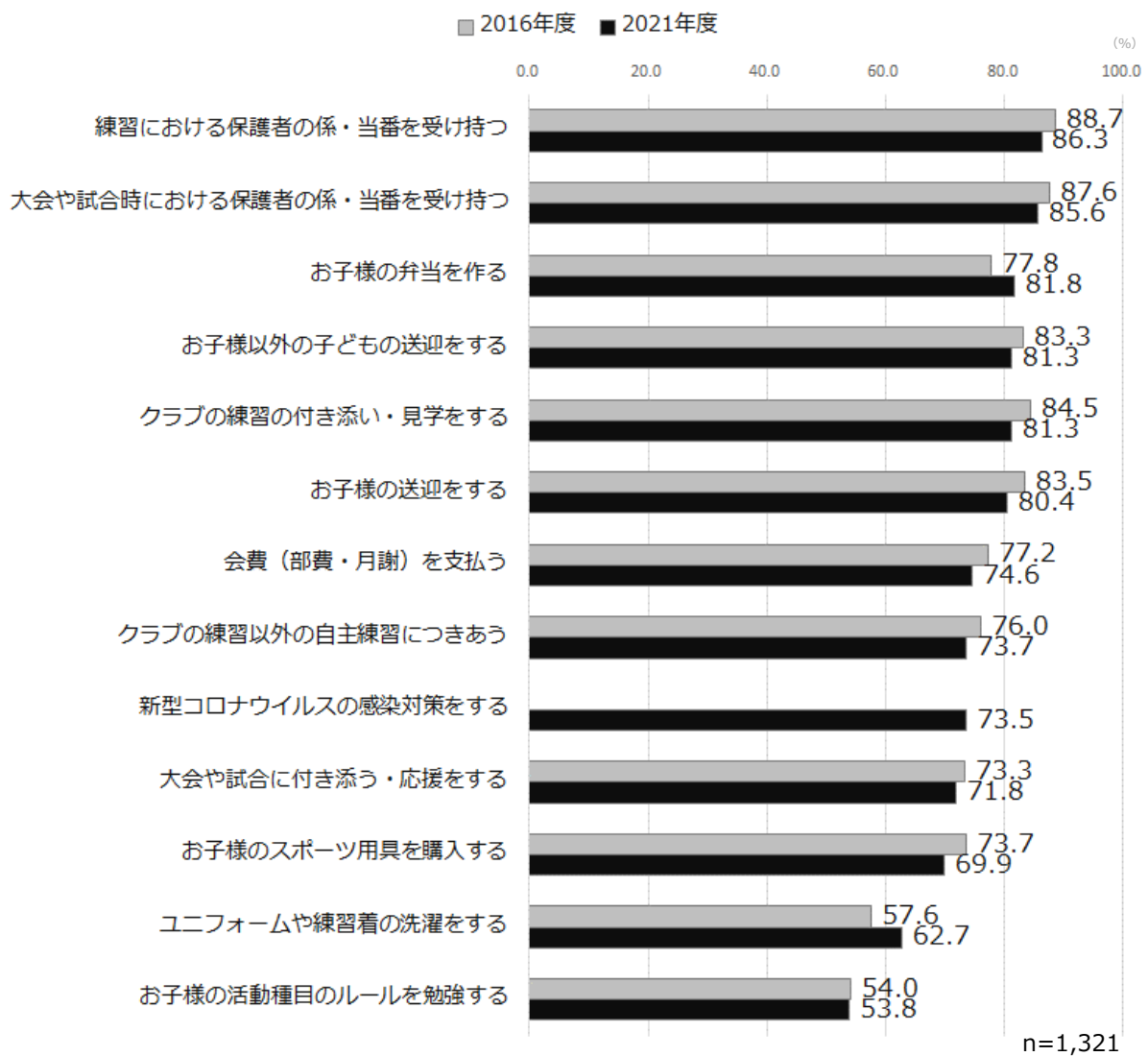
注 2) <>は 5 ポイント以上、<< >>は 10 ポイント以上差があることを示す。

(8) 母親の負担感

子どもが現在スポーツ活動をしていない場合に、「もしこれからお子様が団体(クラブ・教室等)に所属してスポーツ活動をするようになったら、あなたご自身はどれくらい負担を感じますか」と、状況を想定した質問をした(図表 8)。2016 年度と比較して目立った数値の変動はない。「練習における保護者の係・当番を受け持つ」「大会や試合時における保護者の係・当番を受け持つ」がいずれも 85%程度と、もっとも高くなっている。

図表 6-1、6-2(p9-10) で見たように、スポーツ活動に関与する母親は、ある程度負担感があるものの、やりがいにも支えられていた。しかしスポーツ活動をしていない子どもの母親にとっては、自身が関与する場合の負担感が非常に大きく、そのような意識は 5 年前からほぼ変化がみられないことが分かった。

図表 8 母親の負担感(スポーツ活動をしていない子)



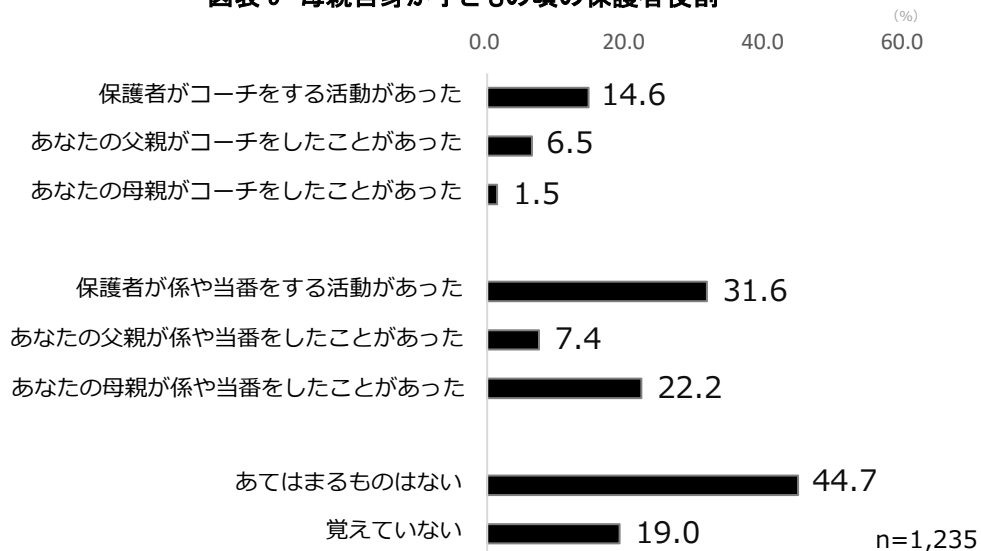
注)「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

(9) 母親自身が子どもの頃の保護者役割

2016年度の母親に対するインタビュー調査のなかで、「子どものころ弟が野球をやっていた時に母親がかかりっきりだった」という声があがった。そこで、母親自身に子どもの頃を振り返ってもらい、本人やきょうだいがスポーツ活動をしていた場合の保護者の関与について尋ねた(図表9)。

「覚えていない」が約2割いるものの、全体では「保護者がコーチをする活動があった」は14.6%、「保護者が係や当番をする活動があった」は31.6%であった。「保護者がコーチをする活動」では、「父親がコーチをしたことがあった」6.5%>「母親がコーチをしたことがあった」1.5%と父親のほうが多く、「保護者が係や当番をする活動」では母親22.2%>父親7.4%と母親のほうが多かった。過去の振り返りとして尋ねているため限界はあるものの、子どもたちの祖父母世代から、指導以外の関与は母親が中心であるという構造には変化がない様子がうかがえる。

図表9 母親自身が子どもの頃の保護者役割



注)複数回答。母親またはそのきょうだいが小学生の頃にスポーツ活動をしていた場合に尋ねている。

以上、速報値から4点の特徴がまとめられる。

- ①コロナ禍で保護者の組織・係や当番は継続したが、保護者が関与する機会や当番の種類などは減少した団体も多い。
- ②「指導者や保護者の送迎」「指導者・保護者の食事や飲み物の用意」といった、一部の保護者が行う団体全体に関わる活動は、特に負担感が高い。
- ③関与している保護者は、負担感がありながらもやりがいのも感じている。一方で、子どもがスポーツ活動をしていない保護者にとっては、自身が関与することを想定した場合の負担感是非常に高い。
- ④父親の関与が多い項目もあるものの、全体的に母親中心に関与している様子は前回調査と変わらない。

今後、分析を加えて報告書としてまとめる予定である。